

よく喋るマダム達はパクチーより食えない (バツイチ探偵興呂木参次郎の事件簿)

登場人物

- 興呂木参次郎 (おころぎ・さんじろう)
野村純平 (のむら・じゅんぺい)
稲沢智樹 (いなざわ・ともき)
船村重吾 (ふなむら・じゅうご)
高倉剛助 (たかくら・こうすけ)
高倉節子 (たかくら・せつこ)
高倉瑠衣 (たかくら・るい)
畑中早苗 (はたなか・さなえ)
戸鞠満智子 (とまり・まちこ)
佐野芳江 (さの・よしえ)
石田涼子 (いしだ・りょうこ)
高倉節子 (たかくら・せつこ)
住田公則 (すみだ・きみのり)
茜空萌絵 (あかねぞら・もえ)
鴨下百合子 (かもした・ゆりこ)
鴨下圭吾 (かもした・けいご)
住田雅子 (すみだ・まさこ)
- 子持ちバツイチの中年探偵
参次郎の助手で後輩
高倉商事の専務、瑠衣の婚約者
小説家、普段は来々軒の親父
高倉商事の会長、高倉節子の夫
オレンダーのオーナー
剛介、節子夫妻の娘
高倉家のお手伝い
オレンダーの元従業員
オレンダーの元従業員
オレンダーの元従業員
の若い頃
節子の昔の恋人
来々軒のバイト店員
節子の娘
百合子の夫
住田君則の母

昼間、興呂木探偵事務所。舞台奥は暗く、上手、照明に浮かぶ興呂木参次郎。

参次郎

この俺、探偵・興呂木参次郎には苦手なものが三つある。パクチー、生ガキ、良く喋るオバちゃん。中でも一番食えないのが三つめ。トラウマ級の苦い思い出は元妻とのバトルをはじめ、数え上げたらキリがない。そして今回、この平穩な事務所にみようちくりんな案件を持ち込んだのも、そんなオバちゃん達だった。一月前に突然閉店したブティック・オレンダーの元従業員、(下手に登場する三人の女達が照明に浮かぶ)戸鞠満智子、佐野芳江、石田涼子だ。あの日、この三人のオバちゃん達は、事務所のドアを蹴破るような勢いで飛び込んでくるなり、中年オバちゃん特有の甲高いマシンガントークをぶっ放した。

満智子

言っちゃ悪いけど、汚い事務所ね。日当たりも悪いし、こんな所に閉じこもっていたら病気になるわよ。

芳江

おころぎって読むのよね。表の看板フリガナ振つといた方がいいんじゃない。

涼子

コーヒーありがとう。でも悪いわね、緑茶に替えてくれる。

女達はフリーズ。照明は参次郎だけ残す。

参次郎

このオバちゃん達、およそ探偵事務所にはお門違いの相談を持ち込み、自分らで勝手に決めた条件で俺に引き受けるという。最初に払うのは着手金の五万だけ。成功報酬は弾むと言いながら、具体的な金額を尋ねると、

再び動き出す女達。

満智子

やだもう心外だわ。私たちの事が信じられないって言うの。

涼子

お金お金ってそんな野暮な事、人間お金が全てじゃないでしょ。

芳江

貴方評判よ。いつも世の為人の為、困ってる人は放つとけないって。

涼子・満智子

(掛け声)よつ、人情探偵。

参次郎

なんてとぼけた台詞で人を煙に巻く、海千山千だ。(女達の照明が消え、もれ明かりの中事務所で勝手な事をしている女達)オバちゃん達の主張はこうだ。繁盛していたブティックの突然の閉店はある得ない。長年勤めた自分達に相談すら無かった。退職金にも納得出来ない。そもそも閉店理由も聞かされていない、エトセトラエトセトラ。ちよつと待て、正当な主張なら、なぜ弁護士か役所の窓口に関わらない。長年の経験で分かるが、この手のオバちゃん達に関わったら、必ず後で痛い目に遭う。て事で、ここはビシッと断ろうと

思った、と思ったんだが、あいにくこの時、俺の厳しい財政状況がそれを許さなかった。三月も溜めた事務所の家賃も、五万払えば大家にあと一月だけ待つてくれと泣きつくことは出来る。やっぱり着手金だけは頂こう。まあ調査は適当にやっつて、「出来ることはすべてやり尽くしました。手掛かりすら掴めず、痛恨の極みです」とかなんとか言ってお茶を濁せばいい。どうせ相手はオバちゃんだ。「うん、分かりました。別の案件も山ほど抱えていて非常に忙しいんですが、お困りの様ですからこの話、引き受けましょう」

満智子の高笑いが響き、昼間の明かり。

満智子

何もったいつけてんの、断れないんですよ。依頼なんてほとんど無いくせに。

参次郎

いやいやいや、ウチには毎日、

芳江

毎日事務所に押し掛けて来るのは借金取り。

参次郎

ちよつと待つてくれ。

涼子

半年前に貴方が起こした傷害事件、

参次郎

え、

満智子

前科にこそならなかったけど、噂が広がって調査依頼はめっきり減ってしまった。

芳江

ヤクザまがいの興信所って噂のせいで。

参次郎

何でそれを、

涼子

どうして喧嘩なんてしたの。

参次郎

だからそれは、

芳江

でもいい話も聞いているのよ。フェミニストで女性の頼みは断れない性格なのよね。

満智子

芳江さんそれオブラートに包み過ぎよ。ただの女好きって話だったんじゃない。

芳江

そうだったかしら。

参次郎

いいかな、ここははっきりさせておくけど、こっちはあくまで人助けのつもりで、

涼子

気を悪くしないでね。勿論探偵としての腕も確かかって聞いたからお願いしてるのよ。

満智子

離婚した奥さんに払ってる慰謝料や養育費で首が回らないって話も聞いてるけど。

参次郎

もういい分かった。あんたらの調査能力は本職顔負けだ、それは認めるよ。いっそのこの案件も自分らで解決したらいいんじゃないの。

涼子

貴方の事は別に調べた訳じゃないの、たまたま小耳に挟んだだけ。

芳江

お昼、毎日中華でしょう、この近くの来々軒さん。

参次郎

そんな事まで、

涼子

私達三人も、おといたまたま出前を取ったの、来々軒さんの。

満智子

まずいお店よね、星マイナス十個。あんかけの粉がダマになって、「何で中華丼に白玉が入ってるのよ」みたいな、

芳江

肉野菜炒めだって肉が魚肉ソーセージって、あり得ないでしょ。

参次郎

出前の話も、もういいから。

涼子

でもその出前を届けてくれたバイトの女の子が教えてくれたのよ、
貴方の事色々。

参次郎

…萌絵ちゃん。

芳江

店の料理はともかく、可愛い子ね。貴方の事、親切なおじさんで頼
りになるって言ってたわよ。

満智子

でも誘われてる映画はどうやって断ろうか困ってるみたいよ。

芳江

ああ、言ってたわねそれ。おじさんを傷つけたくないけど付き合っ
てる彼氏がヤキモチ焼きだからって。

満智子

まさかと思うけど貴方本気じゃないわよね。

参次郎

あのな、

芳江

随分歳が離れてるんじゃない？

参次郎

(切れそう)だから俺のプライベートは放つといて貰えるかな。

涼子

(笑)そうね。本題に戻しましょう。じゃあこの依頼、引き受けて頂くという事でいいのよね。

参次郎

ただし、こっちのプライベートに立ち入らないのが条件だ。

芳江

良かった。

参次郎

すぐに調査を開始するから……とりあえず着手金だけは、

涼子

はいこれ。(封筒を渡す)五万円。

参次郎

お、(受け取り、ニンマリ)用意がいいね。

涼子

それからこれ、(紙とペン)受け取りにサイン貰える。

参次郎

受け取り、

涼子

もちろんよ。私達素人だからこういうの慣れてないの。慎重にしくちや。経費は必ず領収書を貰ってね。調査に関係ないものは受け付けないから。

参次郎

(受け取り、サインしながら)何が素人だよ。しつかりしてるよまったく。(書き終わり)ほら、(渡す)

満智子

期待してるわよ。

芳江

お願いするわね。

涼子

さすがに成果がゼロだったらその着手金も返して頂くから。

参次郎

え、

涼子

当たり前でしょう。

芳江・満智子

(笑顔)当たり前よね。

参次郎

(消え入るように)え…。

転換明かりの中、女たちが退場し、代わって野村順平登場。純平の笑い声が聞こえ、舞台明るくなる。同じ日の夜、事務所。

純平

厚かましいオバちゃん達ですね。でも、良かったじゃないですか、何だかんだ言って、久しぶりに依頼があった訳ですし。

参次郎

いや、良くない。

純平

え、

参次郎

(封筒を眺めながら)つらつら考えるに、やっぱりこれ無理だ。俺はあんなオバちゃん達とは関わりたくない。

純平

何子供みたいなさ言ってるんですか。ウチは今仕事を選べる状況じゃないんです。この依頼、何とか形にして成功報酬頂きましょうよ。

参次郎

あいつら後出しジャンケンだった。

純平

何ですかそれ？

参次郎

長い間勤めていたのに、閉店の理由すら聞かされなかったって。

純平

それ、嘘だったんですか？

参次郎

それは嘘じゃなかった。

純平

じゃあ何が、

参次郎

退職金の額が一月分の給料にも満たないって。

純平

それが嘘だったんですか？

参次郎

それも嘘じゃない。

純平

参次郎さん、何が言いたいんですか。

参次郎

最初にそんな話をして、不当解雇だなんだって騒ぐから、いけ好かないオバちゃん達だったけど依頼を受けたんだよ、こっちは。

純平

閉店理由さえ教えて貰えないなんて十分不当解雇じゃないですか。きつとブラック企業ですよ、そのブティック。

参次郎

ブラックどころか超優良だよ。

純平

どうしてですか、

参次郎

オバちゃん達は三人とも派遣社員だったんだ。

純平

派遣、

参次郎

そう。最後にポロリと漏らした。後出しジャンケンだろ。

純平

派遣……ですか。

参次郎

そういう事。だからそもそもオバちゃん達と店の間には直接の雇用契約すら無い。突然の解雇って話も、派遣会社の契約書に記載されている事前の通告日数は満たしていた。

純平

…じゃあ、店は派遣の契約を更新しなかっただけ。

参次郎

そう。それなのに、金額はともかく退職金も支給された。

純平

…う〜ん。(考え込む)

参次郎

なあ、もうオバちゃん達の話や家賃の問題はちよつとこっちに置いて、ここは一つ憂さ晴らしにこいつで(封筒を)ぱくつと、

純平

(封筒没収)馬鹿言わないで下さい。滞ってるのは家賃だけじゃないんですよ。

参次郎

(独白)そうなんだよな〜。

純平

参次郎さん、そもそもオバちゃん達の要求は何なんですか？

参次郎

聞いてどうするよ、どうせ断る依頼だ。

純平

教えて下さい、依頼内容。

参次郎

言いがかりみたいなた話だよ。閉店理由をオーナーの口から直接聞きたいんだと。

純平

どういう事ですか。

参次郎

店を閉めるって話が出る少し前からブティックのオーナーは体調を悪くして店に出なくなつた。閉店の話はオーナーの義理の息子から告げられたが、通り一遍の説明は納得出来ない。だから直接オーナーと話がしたい。

純平

じゃあ、オーナーの口から閉店理由が聞けたら、それで納得出来るんですか。

参次郎

本音はともかく、一応そういう話だ。

純平

でも、それだったら自分達で、

参次郎

自宅まで押しかけても家族がオーナーに会わせてくれないんだと。

純平

ふくん、それ位、体調が良くない、と。

参次郎

(頷き)オバちゃん達の本音は退職金の増額か職場復帰といったところ

ろだろ。善良な店だから、もっと甘い汁が吸えると思ってんだよ。「あんなに繁盛していた店を突然閉めるのは絶対におかしい」って、オバちゃん達何度も言ってた。店の弱みでも見つけたら、そこを攻めるつもりだ。俺はそんな悪事の片棒を担ぐ気は無い。

純平

たとえオバちゃん達が何か企んでいたとしても、こっちは閉店理由を探り出したら依頼は終了、案外楽な話じゃないですか。さっさと終わらせて成功報酬がっぽり頂きましょうよ。

参次郎

お前は金で魂を売るのが。

純平

参次郎さんこそ、子供みたいな好き嫌いやめてくださいよ。

参次郎

なあ純平、そろそろ諦めつか、この事務所。

純平

何弱音吐いちゃってるんですか。

参次郎

お前も、俺やこんな事務所と縁が切れたら、もっと楽になれっぞ。

純平

そんなのとづくに分かっていますよ。

参次郎

つくかこの半年まともな依頼なんて全然来ないし、この先良くなる気配もない。

純平

自業自得でしょ。参次郎さんがあんな喧嘩するから。

参次郎

(笑って)こまかす)そうだ純平、この金(封筒)、退職金として半分お前にやるよ。俺はこれから夜逃げする。荷造り手伝ってくれ。

純平

退職金が二万五千円ですか、思いがけない大金をありがとうございます。

参次郎

気にするな。

純平

冗談やめてください。夜逃げなんて話は、俺がずっと立て替えてる事務所の光熱費と、何か月も頂いてない給料を払ってからにしてください。

参次郎

今それを言うか。

純平

言わせて貰います。

参次郎

俺に優しくしてくれる人間はいないのかね。

純平

これまた自業自得、奥さん大事にしないからですよ。

参次郎

うっせ、

純平

参次郎さん、何でこの依頼受けられないんですか。

参次郎

興呂木探偵事務所のポリシーは勸善懲悪だ。この話、どう見ても悪
代官はオバちゃん達だろ。

純平

大人になりましょうよ。

参次郎

僕ちゃん、汚い大人は嫌い。

純平

そのくせ俺の給料は払わない。

参次郎

出世払いだよ、来世で必ず払う。

純平

どんだけ待たせるんですか。

参次郎

純平、こんな話やめて(封筒を取り)なんか旨いもの食おう。なつ、

純平

(取り返し)やめてください。依頼受けないのなら、これは返す金で
す。

参次郎

頭固いな。

純平

何が正義の味方ですか。依頼人を好き嫌いで差別する方がよっぽど、
(はたと気づき)あ…そうか、そうですよ。

参次郎

何だよ。

純平

そうか、そうですよ。

参次郎

は？

純平

所長、ポリシー曲げずに、成功報酬がたっぷり頂きましょう。

参次郎

ん？

舞台前面、二人並んでキャスター付きの事務椅子に座り、マイムでハンドルを持つ参次郎。SEで車の走行音、車内で話す参次郎と純平。

参次郎

純平、この道で間違いないよな。

純平

大丈夫です。この先二つ目の信号、右折でお願いします。

参次郎

しかし、普通運転は助手の仕事だろ。

純平 俺、免許無いですから。

参次郎 お前が頭使って俺が汗をかくってか、立場が逆だよ。

純平 ブツブツ言っていないで、もう着きますよ。あ、ほら、多分あの白壁の……うわぁお。

参次郎 何だよこれ、すんげー豪邸だな。

キヤスター椅子に座ったまま下手に退場する二人。舞台奥明るくなり高倉家の客間。下手奥よりお手伝いの早苗、純平、参次郎の順で登場。

早苗 しばらくこちらでお待ち下さい。今、対応する者が参りますので。

純平 ……対応する……。

早苗 はい。ご連絡を頂いた際に電話に出た、稲沢専務です。

純平 ああ……そうですか。

早苗 (立っている二人を促し)どうぞ、

純平 どうも。

参次郎も会釈をし、純平と二人ソファーに腰を下ろす。舞台中央の出口から出て行く早苗。

純平 (早苗の退場を目で見送り) …対応するね。俺、お手伝いさんなんて、テレビ以外で初めて観ましたよ。

参次郎 うん。

純平 ね、「専務」って、どういう事ですかね。

参次郎 …うん。

純平 (見直し)にしても、立派なお屋敷だな。いつものウチの客層とは大違いだ。ですよね。

参次郎 …うん。

純平 参次郎さん、さっき言ったように要件は俺が電話で伝え済みです。「元従業員が言いがかりをつけて利益を得ようとしている、トラブルを未然に防ぐ為にお力になりますよ」ってのが基本的方向性で。感触は良かったんで、あとは参次郎さんのトークで、頼りになる興信所をアピールして、ビシッと決めちゃって下さい。なんつっても

第一印象が肝心ですから。

参次郎

なあ純平、

純平

はい。

参次郎

やっぱり、帰ろう。

純平

はい？

参次郎

気が進まん。

純平

またまたまた、何言っちゃってるんですか。

参次郎

あんなオバちゃん達だが、一応ウチの客だろ。

純平

参次郎さん、事務所で、そりやいい考えだ、それだったら俺のポリシーに反する事は何もないって言いましたよね。

参次郎

あん時はそう思ったんだ。しかし、つらつら考えるに、

純平

もうその「つらつら考える」はやめてくださいって。

参次郎

もしかしたら、オバちゃん達は単純にガサツなだけで、悪人じゃないかも、

純平

人の誠意につけ込む腹黒オバちゃんだって、参次郎さん、そう言っただじゃないですか。

参次郎

やつぱり依頼人を裏切るのは、俺の職業倫理に、

純平

もうめんどくさ過ぎです。そんなんだったら、最初からこんな案件受けなきゃ良かったんですよ。

参次郎

俺は端からそう言ってるよ。勝手に話をどんどん進めたのはお前だろ。

純平

俺が悪いんですか、俺のせいですか。

参次郎

そうだよ、俺がちよつとオバちゃん達の話をしたら、お前はすぐに金に目が眩んで、

純平

よくそんな事が言えますね。ウチの借金いくらあるか分かってるんですか。事務所を維持する為に俺がどれだけ身を削る思いで頑張ってきたか、

参次郎

逆だよ、お前がチマチマした女々しいやり方で事務所を切り盛りするから何も上手く行かないんだよ。

純平

いっつもやりたい放題やってる人が勝手な事言わないで下さいよ。自分じや何も責任とらなくせに、

参次郎

何だその言い方は。お前みたいにポリシーもロマンも無い男には、探偵なんか勤まらないんだよ。

純平

何がポリシーですか、後先考えずにあんな喧嘩して、そんなんだから奥さんにだって逃げられるんですよ。

参次郎

あつ、それ言うか、それ言うか、

純平

こうなったら何だって言いますよ。言いたいこと言わせて貰いますとも。

参次郎

よし、言えるもんなら言ってみろ、(ヘッドロック)

純平

いて、いてて、何するんですか、

参次郎

ほら言ってみろ、

純平

いてて、わがままで、女好きで、大酒飲みで、

参次郎

まだ言うか、

純平

いてててて、給料払え、立て替えてる金返せ、

SEドアの開く音。いきなり入ってくる稲沢。瞬時に何事も無かったかのように装う参次郎と純平。

参次郎

とまあ、こんな感じに、抵抗する相手にはヘッドロックが有効なんだよ、純平君。

純平

なるほど。実技をやって頂くと判りやすいです、所長。

稲沢

あの、

参次郎

(純平を放し)失礼しました。興呂木探偵事務所の興呂木参次郎です。

純平

電話した、助手の野村純平です。

稲沢

…稲沢です…金、返せって？

純平

あ、悪徳金融業者の撃退、なんて依頼も良くあるんですよ。

稲沢

ああ、なるほど。

参次郎

我々探偵は日々のちよつとした時間を見つけては訓練を怠らないようにしています。

稲沢

そうなんですか。

純平

今日はお時間を割いて頂き、ありがとうございました。

稲沢

いえ、こちらこそ。わざわざご連絡頂き、ありがとうございます。

純平

では、さっそくですが、所長の興呂木からご説明を、

参次郎

いや、今日は、純平君、君の方から。

純平

(小声)参次郎さん、

参次郎

(促す)うん。

純平

そうですか、分かりました、では。今回、ご依頼を受けた訳でもないのに、こちらに伺ったのは、ウチに話を持ち込まれたその女性達に異様な雰囲気を感じたからです。何か、ストーリーチックという

か、こういった場合、例え不当な要求でも扱いを間違えると面倒なトラブルに発展することもあるからです。

稲沢

そうなんですか。ありがとうございます。

純平

という事で、

参次郎

まあそういう訳で、お気を付けになった方がよろしいかと、ただそれだけお伝えしたくて伺いました。

純平

え、

参次郎

ではこれで失礼致します。純平、帰るぞ。(下手に)

純平

何言ってるんですか。(下手に向かう参次郎の背に)参次郎さん、

稲沢

あの、

純平

あ、はい。(参次郎の腕を掴み引き止める)

稲沢

…今日は、ありがとうございます。

参次郎

どういたしまして。

稲沢

お知らせ頂いて助かりました。この件は、ウチの方で慎重に対応致します。

純平

…そう、ですか。

参次郎

そうして下さい。

稲沢

実は…申し訳ありません。本当の事を言うと、ついさつきまで疑ってました。

純平

え、

稲沢

つまり、大変失礼な話ですが、お二人がおいでになった目的は、お金だと思ってきました。

純平

(ひきつった笑い)それは、無いですよ。

稲沢

ええ、良く分かりました。でも、今どき何の見返りも期待せず、こんな事をして下さる方がいらっしやるなんて思わなかったものですから、お許しください。(頭を下げる)

参次郎

…いや、そう思われても仕方ありません、こんなご時世ですから。

純平 本当、お気になさらず。

稲沢 それであの、お二人が純粋に、親切なお気持ちだけでおいで頂いた事を承知の上で、(スーツのポケットから財布を取り出し)大変失礼なんですが、

二人 え… (笑みが広がる)

稲沢 (純平に)些少ですが、交通費の足しにして下さい。裸でお渡しするのも失礼なんです、(札を数枚取り出す)

純平 (貰う気満々)そんな、頂けませんよ。ねえ、所長。

参次郎 (明らかに嬉しそう)うん。我々、決してそんなつもりで、

稲沢 分かっています、分かっています、

下手より瑠衣登場。

瑠衣 智樹さん、

稲沢 瑠衣さん、

瑠衣

(金を持つ手を財布に戻させ)やめてよこんな事。

純平

あれ、

瑠衣

お二人に失礼でしょ。この方たちがお金目当てじゃないって、自分でもそう言ってるくせに。

稲沢

ですから、これは、

瑠衣

智樹さん、それよりママの事、お仕事としてお二人にお願いしましょう。

稲沢

それは…。

瑠衣

こんなに信頼出来る方達だったらお願いしても大丈夫よ。

稲沢

お父様がお許しになりません。

瑠衣

パパの事はいいの。

参次郎

あの、

瑠衣　ご挨拶遅れてごめんなさい、私、オランダのオーナー高倉節子の娘で、瑠衣と言います。

純平　オーナーの、娘さん、

瑠衣　お二人は探偵さんですよね。

稲沢　瑠衣さん、

瑠衣　お願いしたい事があるんです。

参次郎　どういう事ですか。

瑠衣　実は、私たちも知りたいんです。母がなぜ突然、母の生きがいったつたお店を閉めてしまったのか。

純平　ご家族も、それをご存じないんですか。

瑠衣　ええ。二か月前、本当に突然、母はもう何もしたくないって言いだして、まるで生きる気力も失ったかのように、ふさぎ込んで部屋に閉じこもってしまったんです。

参次郎　…二か月前。

瑠衣

お店の事は、いいんです。でも、母のあんな姿を見るのは…。

稲沢

いったい何があったのか…奥様は何も仰らなくて。

参次郎

あの、稲沢さんは…。

稲沢

私は、瑠衣さんのお父さんが会長を務める高倉商事の社員で、この秋、瑠衣さんと結婚する事になっています。

参次郎

婚約者…。

純平

じゃあ、専務さんというのは、お父さんの会社の方での。

稲沢

はい。

瑠衣

母は、とても優しい人ですけど、優しすぎて、昔から時々精神的に落ち込む事はあったんです。そんな母に何か生き甲斐を持たせたいって、父が出してくれたお店が、ブティック・オレンダーです。

参次郎

なるほど。

稲沢

思いがけずお店は繁盛したんですが、会長のお話では、元々、奥様

に元気になって頂く事だけを目的で作られたお店だそうです。

純平 愛妻家なんですね、お父様。

瑠衣 父は母の事だけは、本当に大切にしています。元々絵を描くのが好だった母が、たまたま描いた一枚を父が気に入って、これを何か形にしようって、ドレスの柄にしたんです。そしたら、とても評判が良かったので、いっそお店を出してみたらって、父が勧めて。

純平 素敵なお話ですね。世の中には、そんな男性もいるんですよ。(参次郎をチラリ)

参次郎 何だよ。

純平 分かりました。いや、僕たちでお役に立てることでしたら、ねえ、所長。今度は、文句ないでしょう。

参次郎 ああ。じゃあ、一度お父様ともお会いできますか。

純平 そんな優しいお父様だったら、(上手より高倉剛介登場)きっと、

剛介 瑠衣、何を話している。誰なんだそいつらは。

瑠衣

パパ、

純平

え、

剛介

稲沢君、まさか電話があつたという探偵じゃないだろうな。

稲沢

それがその、申し訳ありません、会長。

剛介

そんな胡散臭いやカラ、なぜすぐに追い返さん。

参次郎

え、

瑠衣

パパ、このお二人、本当に誠実な人達なの。だから、ママの事を相談して、

剛介

瑠衣、家の中の事を外にさらけ出すもんじゃない。

瑠衣

パパ、

剛介

稲沢君、君は何のために今日ここにいるんだ。

稲沢

会長、

剛介

なぜ私に言われた通りにしない。

稲沢

申し訳ありません。

剛介

さ、君たちは出て行ってくれ。

参次郎

な、何だよ、

溜衣

やめて。パパ、失礼よ。

剛介

溜衣、お前は黙ってなさい。

参次郎

ちよつと待ってくれよ。

剛介

ここは君たちのような人種が来るところじゃない。

純平

初めて会ったのに、何もそこまで、

溜衣

パパ、

剛介

出て行かないなら警察を呼ぶぞ。

純平

け、警察、

参次郎

ちよつと待て、こつちは事前に電話して、お宅の義理の息子になる人間の了解を得て来てるんだ。そんなんでも警察に通報されて堪るか。

剛介

分かった。ウチの者から事前に了解を得たと言うのなら、今この瞬間までの君達の滞在は許そう。

参次郎

はあ？

剛介

では、改めてこの家の主である私が、君たちに退去を求める。つまりこの先は一分一秒たりともここに留まる事は許されない。出て行かなかつたら君たちは不法侵入者だ。さあ、警察に通報されたくないのなら、出て行きなさい。

純平

そんな滅茶苦茶な話、

剛介

(下手に向かつて参次郎を押し)出て行け、

参次郎

何すんだよ、(もみ合う)

溜衣

パパ、やめて、

剛介

(胸倉をつかみ押し)出て行けと言ってるんだ、

参次郎

畜生、(ヘッドロック)ジジイこの野郎、

剛介

うわっ、何をするか、

純平

参次郎さん、

瑠衣

パパ、やめて、

稲沢

(割って入ろうとして)おやめください、

SE、ドアが開く音。下手より、節子登場。

瑠衣

ママ、

剛介

…いや…いくら設立記念パーティーの余興とはいえ、会長の私がやるには、ちと激しすぎないかな、これは。

純平

(小声)参次郎さん、

参次郎

…はい会長、もう少し、穏やかな出し物を考えましようかね。

稲沢

(小声で)今日のところは、今日のところは、

転換明かり。高倉家退場。下袖からキャスター椅子が投げ込まれ・正面向きで並んで座る参次郎と純平。(S・E・車のドアが閉まる音急発信する。車中のノイズの中、参次郎と純平の会話。

参次郎 何なんだあの親父は、くっそー、

純平 参次郎さん、スピード出し過ぎ、出し過ぎですって、

参次郎 君たちのような「人種」、何様のつもりだ、

純平 (タイヤの軋み音)ちゃんと前見て、前見て運転して下さいって、

参次郎 人の事を胡散臭いとかヤカラとか、純平、お前も聞いただろ、

純平 危ない、参次郎さん危ない、ぶつかる、ぶつかるって、

S・E・ブレイキ音。舞台明るくなって興呂木探偵事務所。椅子に座り、首をおさえている純平。考え事をしている参次郎。

純平 (当てつけ)痛い、痛いっす、痛いっす、痛いっす、(反応の無い参次郎を見る)俺、誰のせいでこんな目に遭ってんですかね。

参次郎

ぶつかった訳でもないのに、大げさだよお前は。

純平

急ブレーキと急ハンドルで首が前後左右にバウンドして、これ完全にむち打ちですよ。

参次郎

なあ純平、つらつら考えるに、

純平

もはやめてください。何も考えなくて結構です。参次郎さんの言う通り、この件からは手を引きましょう。あんな親父がいたら何も出来ませんよ。

参次郎

そうなんだよ。あの親父さんの反応、冷静になって考えてみたら、いくらなんでもおかしくないか。

純平

ああいう金持ちは、みんなあんな感じじゃないんですか。

参次郎

普通、探偵って職業だけで初対面の人間にあそこまで拒否反応を示すか。

純平

(手帳に)薬局で買った湿布代五百七十円、つけときますからね。

参次郎

あの稻沢専務の立ち位置も分からん。まだ結婚していないのに、オバちゃん達にはオーナーの義理の息子だと自己紹介してるし、逆に

お手伝いさんからは「対応する者」なんて微妙な呼び方されて、親父からはただの部下扱いだ……。顔は見せたけど一言も話さなかった。オーナー高倉節子のあの目、あれも何故か気になる。

純平

もういいですって。オバちゃん達の依頼は金を返して断りますから。もちろんオバちゃん達を裏切ってブティックに肩入れするって俺のアイデアもボツで結構です。

参次郎

なあ純平、せっかくあの家訪問したんだし、この案件、本気で考えてみるか。

純平

はあ？

参次郎

なんか色々気になる事があり過ぎる。

純平

参次郎さん、どんだけひねくれてるんですか。俺があんなに頼んでも全然やる気起こさなかつたくせに。

参次郎

チャレンジすべき謎が見えると急にやる気スイッチが入る、探偵の性だなこれ。

純平

ほんゝとめんどくせ〜。俺、頭おかしくなりそうですよ。

芳江

(盆にお茶を載せて上手より登場)そんな時はお茶でも飲んで、一息入れたら。

純平

こりやどうも、ありがとうございます。だ、誰だよあんた、

参次郎

オ…オバちゃん、

純平

え、オバちゃんって、もしかして、

参次郎

…そうだよ、依頼人の一人だ。

涼子

(上手より登場)一人じゃないわよ。

満智子

(上手より登場)三人セットで揃ってるから。

純平

え、

芳江

ごめんなさいね、このお茶本当は私たちの分なの。(テーブルに置く)

参次郎

…あんたら、いつからここに、

涼子

あなた達が帰ってくる少し前よ。

参次郎

じゃあ、俺たちの話…。

満智子

ダダ漏れ。

芳江

隠れてたわけじゃないのよ。キッチンでお茶を用意してたのに、気づかないんだもん。

純平

鍵、掛かってたでしょ。どうやって中に、

萌絵

(上手より登場)チーツス、あたしです。

純平

萌絵ちゃん、

萌絵

だって出前のお皿回収に来たけど、表に出してくれてないから。でもって鍵は消化器の下に置いてるの知ってたし。ついでにこちらのマダム達、表でお待ちだったから、大切なお客様でしょ。どうぞどうぞって。

参次郎

入れてあげたんだ、萌絵ちゃんが。

萌絵

そうよ。気が利くでしょ。

純平

…萌絵ちゃん…。

萌絵

あれ、どした？

涼子

さっそくオーナーのご自宅を訪問してくれたようね。

満智子

只、こちらの依頼とは百八十度違う目的だったみたいだけど。

涼子

探偵事務所ってこんなエグイ事やるのね。

萌絵

(参次郎達の顔を覗き込み、嬉しそうに)何、なんかやつちやったの？

芳江

率直に言ってみよう。

涼子

依頼情報を、事もあろうに調査対象にリークして、

萌絵

え、

満智子

お金のありそうな方に乗り換える。

萌絵

あら〜。

純平

いや、別に、金だけの問題では…。

涼子

じゃあなんなの。

純平

…。

芳江

探偵事務所としては、ある意味、傷害事件より重大な信用問題かも。

純平

あの…落ち着いて話し合いませんか。

満智子

私達は至って落ち着いてるけど。

涼子

これネットで流したら、この事務所アウトね。

純平

え、

芳江

ジ、エンド。

満智子

だって弁護士が警察に「うちの依頼人が犯人です」って通報するよなものよ。

萌絵

そんな事やっちゃったんだ。

純平

ちよつ、ちよつと待ってくださいよ。

参次郎

ジタバタするな純平。

純平

参次郎さん、

参次郎

残念ながら、俺たちは最悪の事をした。オバちゃん達の言う通りだ。

満智子

その「オバちゃん」はやめなさい。

参次郎

マダム達の仰る通りです。俺達がやった事は、まったく最低だ。

純平

…参次郎さん…。

涼子

往生際がいいのね。

参次郎

だけどな、元々無理があるんだよ、あんたらの主張には。

涼子

何が無理なの。

参次郎

いいかい、派遣社員は店に直接雇われてる訳じゃない。だから退職金は貰えたら奇跡で、金額に文句なんて言ったら罰が当たる。店を閉めるか続けるかなんて経営者の判断にも派遣が口をはさめる筈がない。そりゃあんたらにも生活はあるだろうけど、

満智子

ちよつと待ちなさい。私達がいつ退職金が少ないって言った。

参次郎

え？

満智子

生活に困るから店を続けさせてなんて依頼、した覚え無いけど。

参次郎

確かに、ストレートにそうは言わなかったが、要するにそういう、

芳江

涼子さん、なんか勘違いしてるみたいよ、この人。

涼子

そうみたいね。

純平

参次郎さん？

参次郎

いや、だって…。

涼子

私達はね、只、オーナーの…節子さんの事が心配なだけ。

参次郎

え、

芳江

節子さんは、私達の恩人なの。

満智子

オレンダーの立ち上げから、節子さんと私達はずっと苦楽を共にした仲間なのよ。だから、こんな終わり方はおかしいの。

涼子

そう、何かある筈なのよ、よつほどの理由が。じやなきや節子さんが私達に訳も話さないでお店を閉めちゃうなんて考えられない。

芳江

あんな手切れ金みたいなお金を渡して、それでサヨナラなんて、節子さんのやり方じゃないのよ。

参次郎

…退職金が、不満ってのは…。

芳江

そういうやり方よ。

涼子

水くさいって事。派遣とか社員とか、そういう隔てなく、いつつも私達の事に親身になってくれたのが節子さんだもん。

芳江

私なんて旦那にないのに子供は三人、だからお店が忙しい時期にお休みしなくちゃならない事が何度もあって、その度にみんなに迷惑かけて、いつクビになるかとビクビクしてた。そんな私に節子さん、「新しい人なんて入れない。芳江さんはオレンダーの家族の一人なの、家族の替えなんていないでしょ」って。

満智子

私が二ヶ月以上入院してた時も、同じ事言ってくれた。忙しい中、

何度も見舞いに来てくれて。

涼子

節子さんに励まされた事なんて、数え上げたらきりが無い。でもあの人、余裕があつてそうしてるんじゃないやなくて、優し過ぎて周りの人間の痛みまで背負い込みながらそうするの。そんな繊細な人なのよ。…なのに今度は、そんな節子さんが…。

純平

皆さんに何の説明もなく、突然お店を閉めてしまった訳ですか。

満智子

おかしいでしょう。

涼子

何か深い訳があるに違いない、だとしたら今度は私達が節子さんの為に、何かしなくちゃいけないんじゃないかって、そう思ったの。

参次郎

うん、成程。

純平

いやいや参次郎さん、そこ「成程」じゃないでしょ。

参次郎

ん？

純平

反省の言葉は？なんで皆さんの話をちゃんと聞かなかったんですか。

参次郎

…純平君…。

満智子

私達を初めて見た瞬間から、色眼鏡で見てたのよね、あなた。

涼子

オバちゃんは煩い、オバちゃんは理不尽だ、オバちゃんとは話が通じない、そんな目で見た。だから話をまともに聞いてなかったのよね。

参次郎

(小声)いや、そちらの説明にも…問題は…。

満智子

人のせいにしない。

芳江

なんかあったのトラウマになるような事？

純平

色々あるようです、前の奥さんとの事とか。

参次郎

純平く〜ん。

萌絵

あ、私にはいつも「若い子の方が話が合うんだよ」って。

参次郎

萌絵ちゃん、皿持って、帰っていいよ。

純平

(咎めて)参次郎さん。

参次郎

まあ、後悔先に立たずとは昔の人も良く言ったもので。

純平

ごまかせてませんから。

参次郎

申し訳ありません。

純平

本当、すみません。

涼子

もういいわよ。で、続けてやるの、やらないの、この案件。

純平

え、まだ任せて頂けるんですか？

涼子

節子さんの為にも、少しでも早く真相を知りたいの。他の興信所を
あたる時間ももつたいない。それにさつき、やっとやる気になった
ような事言つてたじゃない。

参次郎

そうなんだよ。

満智子

立ち直り早過ぎでしょ。

参次郎

是非、やらせて下さい。

芳江

まったく。

涼子

で、オーナーの家を訪問して、何か分かったの？

参次郎

それなんだけどね、驚いた事に、家族もブティックの閉店理由を知らないって言うんだ。

満智子

え、

芳江

家族も知らないって…。

参次郎

逆に、娘の瑠衣って子に、どうして母親が店を閉めたのか調べて欲しいなんて頼まれた。

純平

生きる気力をなくして、部屋に閉じ籠ったきりの母を見ているのは辛いからって、言ってみましたね。

女三人

…。

参次郎

そんな話をしていたところに、旦那が帰って来て、俺達はまるでゴキブリみたいな扱いで追い出されたんだよ。

涼子

…そう。とにかく節子さん…やっぱり何かあるのね。

純平

実は、一瞬だけ顔は見たんです。

満智子

節子さん？

純平

はい。一言も話せませんでした。確かに、何か思いつめた表情でした。

芳江

…でも、家族も訳を知らないのよね…。

純平

瑠衣さんはそう言ってたけど、父親の方は知ってるかもしれないよ。ね、参次郎さん。

参次郎

うん。その可能性はあるが、あの親父じゃ聞いても教えてくれないしな。それに、やっぱり娘の方も変だ。

純平

何がですか？

参次郎

普通、店を閉めた理由なんて母親に直接訊かないか。俺達に調べてくれなんて、頼むかな…。

純平

そうですね。

涼子

それ位、節子さんの状態が良くないって事じゃないの。そんな話に触れられない位…。

参次郎

そうかも知れない、かも知れないが、なんかその距離感がやっぱり気になる。

純平

…距離感…。

一同が考え込んでいるところに、下手手前より、ラーメン屋店主の船村重吾登場。

船村

よっ、

純平

おやっさん、

萌絵

ごめん店長。なかなかお皿を返して貰えなくて。

純平・参次郎

ん？

船村

いいんだいいんだ萌絵ちゃん。どうせ客も来ないし。

純平

いいんだ。

参次郎

暇だったら料理の研究でもして、もう少し旨くしてくれよ来々軒の

メニュー。

船村 旨くなつて繁盛したら、ツケ払いの客は構ってらんなくなるけど。

参次郎 普通に食えるレベルにしてくれって話だよ。

船村 参ちゃん、いつも愛情の裏返し〜。

萌絵 店長、なんか用があつた？

船村 あ、いけない忘れてた。表で、ここに入るかどうか迷ってるお客がいたから、連れて来たんだつた。

参次郎 え？

船村 ほらあんた、入った入った。

下手前より、瑠衣登場。

参次郎 あ、

純平 瑠衣さん、